

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月1日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530940

研究課題名（和文）地域の美術館と学校の連携を支援する表現・鑑賞プログラムの共同開発

研究課題名（英文）Joint development of Appreciation Program to Support the Cooperation of School and Local Art Museum

研究代表者

名達 英詔（NADACHI HIDEAKI）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90510272

研究成果の概要（和文）：旭川市内美術館と小・中学校、北海道教育大学旭川校の連携による本研究の成果は以下の様である。

- ① 旭川市内の美術館と学校教育の連携を支援する表現・鑑賞プログラムの開発・提供の実現
- ② 児童・生徒の鑑賞・表現能力の向上
- ③ 地方美術館と学校教育による互恵的な教育プログラム運営の実現
- ④ 参画した学生の教育実践力向上

研究成果の概要（英文）：The results of this study in collaboration elementary and junior high schools, art museums in Asahikawa region and Hokkaido University of Education Asahikawa campus is as follows.

- ① Expression, appreciation program to support the cooperation of school education and art museums in Asahikawa region has been developed and provided.
- ② Appreciation and expression ability of students has improved.
- ③ Education programs operate mutually beneficial by school education and art museums of local was realized.
- ④ Teaching practical abilities of students who have participated has been improved.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総 計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：美術教育 地域連携 表現・鑑賞プログラム

1. 研究開始当初の背景

地域の美術館は、今日的教育を推進する上で有効活用されることが望まれているにもかかわらず来館者数の伸び悩み、教育資源としての活用不足といった地方美術館に特徴的な課題を抱えている。また、学校も美術館

の機能を教育に取り込むことに対して困難を抱えている。本研究は、こうした課題を解消するため、ユーリア・エンゲストロームによる『拡張的学習』理論をよりどころに、地域美術館と学校が連携しながら、それぞれが抱える課題と原因を明らかにし合い、互いの

教育的機能を生かし合うサステナブルネットワークシステムを創出。実践的表現鑑賞教育プログラムの開発、提供を目指すため取り組まれた。また、これに加え、大学による地域貢献を基にした教員養成系大学学生の実践的な学習機会を生み出す事も目指された。

平成20年度より地域の美術館、小中学校、大学による地域連携研究会を開催。平成21年度より、全体会、プログラムワーキンググループともに稼働し始め、組織的な運営が行われはじめた。その上で、北海道立旭川美術館における鑑賞教育プログラム、旭川市彫刻美術館・北海道立旭川美術館でのワークショッププログラム、旭川市彫刻美術館巡回展に伴う出張授業プログラムが開発・実施されてきた。

2. 研究の目的

本研究は、地域美術館と学校教育の連携を支援するための表現・鑑賞プログラムを開発・提供することを目的としている。具体的には、旭川市内教員の研究組織である旭川市教育研究会図画工作科美術科研究部会・北海道立旭川美術館・中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館・北海道教育大学旭川校の四者の連携により表現鑑賞プログラムを開発、旭川市内・周辺郡部小中学校の児童・生徒を対象に提供するものである。このプログラムは鑑賞教育プログラムとワークショッププログラムにより構成され、各美術館が企画・所蔵する作品の鑑賞や造形作家とのコラボレーションを通して児童・生徒の鑑賞・表現能力向上を目指すものである。

3. 研究の方法

旭川市教育研究会図画工作科美術科研究部会・北海道立旭川美術館・中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館・北海道教育大学旭川校の四者から、学校教諭、学芸員、教育普及担当、事務職員、大学教員の代表により旭川地域連携アートプロジェクトの全体会を組織。表現・鑑賞プログラムの開発、提供に関わる全体計画を策定した後、プログラムごとに全体会メンバーの中から担当を選出しワーキンググループを組織。具体的なプログラムの開発と提供に関わる運営方法を検討後実施する。各ワーキンググループは運営に関わる資料、映像、インタビュー、アンケートの収集と分析を行いプログラム実用化のための方法と教育的効果について検証。全体会にて報告、情報交換後検討を加え、プログラムの改善を図る。

各年度の研究計画は以下の様である。

(1)平成22年度

①旭川市内・周辺郡部の中学校美術部員向け鑑賞プログラムを開発、提供した前年度の実績を踏まえ、道立旭川美術館、旭川市彫刻美術館、両館の収蔵品、企画展示を対象とした中学校美術部員向け鑑賞プログラムを改善。対話型鑑賞、鑑賞ゲームを活用して開発・提供する。

②中原悌二郎賞受賞作家とワークショップを行った前年度の実績を踏まえ、造形作家とのコラボレーションによる小・中学生向けワークショッププログラムを改善・提供する。

③小学校低・中学年向けプログラムを開発した前年度実績を踏まえ、旭川市彫刻美術館巡回展示作品を対象とした小学校高学年・中学生向け出張授業プログラムを体感型鑑賞、対話型鑑賞を活用して開発・提供する。

④道立旭川美術館、旭川市彫刻美術館の収蔵品、企画展示を対象とした旭川市内・周辺郡部小学生向け鑑賞プログラムを開発・提供する。

⑤本プログラムをテーマとした市内小・中学校教諭向け研修会での協議、教員志望学生の実習を行う。

⑥①～④のプログラム開発・実施を通して得られた検討資料、映像、インタビュー、アンケートの収集、分析を行い、課題と成果を検証。プログラム実用化に向けた改善案を作出する。

(2)平成23年度

①前年度までに実施した各プログラムの充実を図りつつ、規模、内容、対象、方法、時期を柱にプログラムを整備する。

②プログラムを年間事業として実施するためのガイドラインを開発する。

③市内小・中学校教諭、児童・生徒、保護者を対象にしたプログラム情報の提供方法について開発・実施する。

④プログラムの開発・充実をテーマとした、全体会メンバー以外も参加できる協議の場を創出、実用化に生かす。

⑤プログラム開発・実施を通して得られた検討資料、映像、インタビュー、アンケートの収集、分析を行い、課題と成果を検証。改善案を作出する。

(3)平成24年度

①各プログラムの充実を図りつつ、規模、内容、対象、方法、時期を柱としたプログラムの整備を進める。

②プログラムの実施ガイドラインとプログラム一覧を基に年間事業として試行する。

③市内小・中学校教諭、児童・生徒、保護者を対象にしたプログラム情報の提供方法に

について改善・実施する。

④プログラムの開発・充実をテーマとした、全体会メンバー以外も参加できる協議の場の運用を継続、実用化に生かす。

⑤プログラム開発・実施を通して得られた検討資料、映像、インタビュー、アンケートの収集、分析を行い、課題と成果を検証。継続して改善案を作出する。

4. 研究成果

(1) 鑑賞・表現プログラムの開発と提供

本研究により、以下に示すプログラムを開発提供した。

①道立旭川美術館における収蔵品、企画展示を対象とした中学生向け鑑賞プログラムの開発・提供

・平成22年度

「片岡球子展」鑑賞プログラムをギャラリートーク、アートゲームの二つの鑑賞方法によって構成し、行った。6月に全5回実施し、旭川市内・上川管内中学校美術部生徒延べ340名がプログラムに沿って鑑賞活動を行った。

・平成23年度

「巨匠たちの饗宴」展鑑賞プログラムをギャラリートーク、アートゲームの二つの鑑賞方法によって構成し、行った。8月に全5回実施し、旭川市内・上川管内中学校美術部生徒延べ262名がプログラムにそって鑑賞活動を行った。

・平成24年度

「椅子と絵の対話」展鑑賞プログラムをギャラリートーク、アートゲームの二つの鑑賞方法によって構成し、行った。6月に全4回実施し、旭川市内・上川管内中学校美術部生徒延べ350名がプログラムに沿って鑑賞活動を行った。

②造形作家とのコラボレーションによる中学生向けワークショッププログラムの開発・提供

・平成22年度

北海道立旭川美術館企画展「ウルトラマン・アート」展ワークショッププログラムを行った。本展キュレーターによる講義およびオリジナル怪獣フィギュア制作と展示によって構成され、旭川市内・周辺郡部の中学校美術部生徒延べ320名が8月から11月にかけて参加した。

・平成23年度

中原悌二郎賞関連ワークショップ「つなげて めぐる アートの力」を行った。平成23年度中原悌二郎賞受賞者の小泉俊己氏監修のもと、旭川市内、上川管内中学校美術部生

徒100名が9月～10月に作品制作のワークショップと鑑賞会を氏の講話も交えながら行った。

・平成24年度

北海道立旭川美術館企画展「愛のヴィクトリアン・ジュエリー」展ワークショッププログラムを行った。本展キュレーターによる講義およびオリジナルジュエリーの制作と展示によって構成され、旭川市内・周辺郡部の中学校美術部生徒延べ300名が7月から11月にかけて参加した。

③旭川市彫刻美術館巡回展示作品を対象とした小・中学生向け鑑賞プログラムの開発・提供

・平成22年度

旭川市立彫刻美術館巡回展により市内小・中学校へ貸し出された彫刻作品を有効活用するための出前授業プログラムを行った。全体ガイダンス、対話型鑑賞、体感型鑑賞によって構成され、市内12の小・中学校にて延べ760名の児童生徒が参加した。

・平成23年度

旭川市立彫刻美術館巡回展により市内小・中学校へ貸し出された彫刻作品を有効活用するための出前授業プログラムを行った。全体ガイダンス、対話型鑑賞、体感型鑑賞によって構成され、市内12の小・中・盲学校にて延べ829名の児童生徒が参加した。

・平成24年度

旭川市立彫刻美術館巡回展により市内小・中学校へ貸し出された彫刻作品を有効活用するための出前授業プログラムを行った。全体ガイダンス、対話型鑑賞、体感型鑑賞によって構成され、市内12の小・中学校にて延べ1120名の児童生徒が参加した。

④造形まつりプログラムの開発と提供

「工作玉手箱！いろんな形みつけちゃおう」道立旭川美術館、旭川市彫刻美術館を会場に、複数のワークショップを児童、生徒、一般の市民に向けて提供した。

・平成23年度

7月実施 参加者4000名

・平成24年度

7月実施 参加者2000名

(2) プログラム内容の充実と普及

開発、提供したプログラムの充実と普及について、以下の結果が得られた。

①各プログラムの基本となる実施要項及び年間事業スケジュールの整備が為され、計画的、継続的なプログラムの検討、改善がはかれるようになった。

②各プログラムの機能を整備した事により、プログラム目標の焦点化が図られるように

なり、対象となる展覧会やアーティストの選択がより適切に行われるようになった。また、これにともなう活動内容や時期の変化にも対応する等、積極的かつ柔軟な学習環境デザインが定着した。

③学習者の発達や自律性に配慮したプログラム開発が進み、感覚や言語を重視した鑑賞や表現、美術を核とした人の交流の促し、複数年における学びの積み上げなどが図られ、学習者の内省の深化や表現への理解の拡充が見られるようになった。

④学芸員、教員、学生、アーティストといった各主体やそこから参画した者の職能や教育的特性をより積極的に活かすことを採用した事により、学習者にとって多面的かつ統合的な学びを探究できる場を形成出来た。

⑤本プログラム実施に関連した美術館学芸員、小・中学校教諭向け研修会の計画的な実施および教員志望学生の実習がなされるようになり、地域の教育力向上に寄与した。

⑥プログラムの開発・充実はテーマとした、全体会メンバー以外にも参加できる協議の場として地域の学校教員による研修会、美術館関連の運営協議会及び美術振興会、大学主催による地域連携フォーラムが活用された。

(3)教育効果

プログラム実施による教育効果については以下の様である。

①参加児童生徒、保護者、教員へのアンケートからプログラムが有効に働き、美術作品の鑑賞や造形表現活動に対する意欲の高まりが見られた。

②美術館や、美術表現、鑑賞や表現活動に対する理解の進展が見られた、また、回数を重ねる事による学習内容の質的变化が見られるようになった。

③鑑賞、表現活動における学習方法の幅が広がり、新たな方法を試したり、既習のものをより進化した形で活用する姿勢が見られるようになった。

④他校の児童生徒や学芸員、教員や大学生といった様々な人と交流しつつ学びを進めることに対する意欲が醸成された。

(4)プログラム運営方法の開発

以下の取り組みによりプログラムの開発・提供をサステナブルに行うための運営方法と組織づくりが為された。

①プログラム実施スケジュール並びに実施要項の整備が行われ、年間事業として定着できた。

②プロジェクト推進のための各主体、参画者の効率的な役割分担、組織化が図られ、プログラム運営における各組織の負担軽減がな

された。

③プログラムの案内や実施結果の情報提供が各主体が解説しているwebページや事業報告書、展覧会チラシや各種通信、新聞や放送などの公共メディアによって行われるようになり、学校や課程による美術館利用の普及、活性化が図られた。

(5)地域美術館と学校教育の連携による課題の軽減

他、本プロジェクトにより、以下の取り組みと課題の軽減が見られた。

①各美術館が所属する行政機関において、取り組みに対する評価がなされ、事業化が進められた。また、これにともない、継続的な予算や人員の確保が得られるようになった。

②各主体の自律性を担保しつつ、それぞれの特性を生かし合うネットワークの創出により、柔軟で現実的な企画、運営が実現された。

③既存の教育資源、事業資源を活用する為の工夫をプログラム内容や運営方法に施す事によって課題を互恵的に解決できる方法を見出すなど、連携による課題解決システムが駆動する為の滋養券の抽出が為された。

④組織運営を円滑かつ合理的に進める為の変革として、中学校美術部の連携組織の創設や、学校教員の研究組織の改編、大学生の参画の授業化、美術館施設の柔軟な運用などが行われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 名達英詔、地域の美術館、学校、大学の連携による表現・鑑賞プログラムの共同開発 -旭川地域連携アートプロジェクトに見る、連携システムを動かす要件の抽出-、北海道教育大学研究紀要、査読無し、第63巻第2号、2013、207-216

〔学会発表〕(計2件)

- ① 名達英詔、地域の美術館と学校の連携を支援する表現・鑑賞プログラムの共同開発、大学美術教育学会、2011年9月25日、宮城教育大学
- ② 名達英詔、地域の美術館と学校の連携を支援する表現・鑑賞プログラムの共同開発、美術科教育学会、2011年3月27日、富山大学

〔図書〕(計1件)

- ① 名達英詔、他、協同出版、地域連携と学生の学び 北海道教育大学旭川校の取り

組み、2013、183-205

6. 研究組織

(1) 研究代表者

名達 英詔 (NADACHI HIDEAKI)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：9 0 5 1 0 2 7 2

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし